

< 講 座 >

不 快 動 物

奥 谷 禎 一*

Nuisance Animals in Japan

Teiichi OKUTANI

不快昆虫あるいは不快害虫という言葉は英語の nuisance の訳であるが、nuisance には“迷惑をかける人”とか“うるさい人”という意味で、暴走族や他人にからむ酔っぱらいなど、あるいはこのような行為を意味していて、不愉快とか不快、すなわち unpleasant という意味とはやや異なるように思える。むしろ“五月蠅”と書いて“うるさい”と読ませる類の方が意味は近いのかも知れない。したがって今日不快害虫と言われるものは、視覚的に不快を訴えられるものまで含まれているので、正確な定義づけは困難である。病原微生物の運び屋となるものは衛生害虫で、それ以外の屋内飛来虫は不快害虫とするという説もあるが、今日では後者に喘息やアトピー性皮膚炎などのアレルギー性疾患の抗原となる虫が含まれていることが判明してきたり、個人差が大きい、刺咬被害を生じるものなどがあり、不快害虫と衛生害虫の間に線を引にくい事情も出てきている。さらに近年はほとんど虫のいない都市生活になれた人が、郊外の山林や田畑を切り開いた新興住宅地に移り住み、自然に恵まれているが、いろいろな虫たちに出合い、不快を訴えるケースも増え不快害虫のリストを膨ましていることも事実である。また一方ではいわゆる生態系の破壊が人為的に起り、そのために特定の虫の発生量が急増して不快害虫となるものも多い。

以下に筆者が経験したり、あるいは文献で見たりした不快害虫について記してみよう。ついでに虫に限らず人の住居に侵入して迷惑をかける動物もあげた。これらの諸動物のなかには、局所的な

ものと考えられるものもあるが、参考になるかと思えるだけあげておいた。

1. トビムシ（粘管）目 Collembola

床面が黒っぽい時に気付くと思われ、ホテルや喫茶店からの同定依頼を受けたことがある。特に大きな問題となることはないが、接客業では客に害があつてはと神経を使っているのであろう。種名を確定するには到らなかったが、フォルソムトビムシ *Folsomia fimentaria* (ツチトビムシ科 Isotomidae) または、近似種と思われた。発生源は明らかに鉢物であるので、その除去によって解決した。近年鉢物はほとんどリースであるが、その土壌内には多くの虫が潜んでいて、それが不快を与えることが多い。

2. カゲロウ（蜉蝣）目 Ephemeroptera

ときどき大発生し、灯火に大量に飛来し、夜間の作業に大きな支障を来すことがある。年2世代のものが多いため春と秋に河川近くの人家で閉口することがある。有名なのはオオシロカゲロウ *Polymitarcis shigae* (旧名アミメカゲロウ、シロイロカゲロウ科 Polymitarcidae) で、古くは稀少種と思われていたが、1978年頃から9月中旬頃各地で大発生し、自動車の運転手の視野を害し、その堆積虫体によってスリップ事故を起すことが報じられるようになった。本種の幼虫は水量の豊富な大きな河川の平瀬の粘土質の多い砂中に棲むが、近年河川改修や砂利採取などによって、生息環境が急激に増加したことによると考えられる。このような大発生時には川辺の商店では夜間営業

* 350 川越市霞ヶ関北 1-20-14

が大いに妨げられる。

3. バッタ（直翅）目 Orthoptera

コオロギ類が灯火に飛来するが、さすがに不快を訴えられることはないようである。カマドウマ科 Rhabdophoriadae のマダラカマドウマ *Diestrammena japonica*, カマドウマ *D. apicalis*, クラズミウマ *Tachycines asynamorus* の3種がしばしば屋内に侵入し、特に大きな害をすることはないが、その特異な形や長い触角で、視覚的に不快を訴えられることがある。植物質から動物質まで極めて雑食で、湿度の高い床下に常に生息していて、ときどき人前に現われる。生活史については未知である。

4. ハサミムシ（革翅）目 Dermaptera

特別の被害はないが、地下街の飲食店に住みついていることがあり、また鉢物について運ばれ室内を歩行しているのを見かける。ハサミムシ科 Anisolabididae のヒゲシロハサミムシ *Conolabis marginalis*, キアシハサミムシ *Euborellia plebeja*, ハマベハサミムシ（ハサミムシ）*Anisolabis maritima* などで、雑食性ですこしの隙間例えばマンホールの蓋の隙間などを利用して生活しているものかと思われる。発生量の多い場合には一応防除対象となる。

5. ゴキブリ（蜚蠊）目 Blattaria

衛生害虫として取扱われるので、ここではとり上げないが、視覚的不快虫としては、常に第1位にあげられる。

6. シロアリ（等翅）目 Isoptera

有翅虫の群飛や、材中の多量の職蟻を見て不快を訴えられることがある。木材害虫あるいは建造物害虫として処理される。

7. チャタテムシ（嚙虫）目 Psocoptera

食品害虫として取り扱われているが、食菌性でもあり、畳や木材のカビで繁殖し集合住宅で大量に発生することがある。共働きの家庭や独身者の室は日中締切った状態で湿度が上昇し、カビを生

じ、チャタテムシの繁殖を助けやすい。体長1～2mmなので、小数では問題にされないが、量が多いと不快を訴えるようになる。英語で booklice（本ジラミ）と呼ばれるのは、古い本に生えた黴に発生したものをよく見るので、このように名付けられたものである。詳細な研究は乏しいが、下記の7種程度が屋内生息種で、はじめの2つの科のものは食品害虫といわれる。動いているのが肉眼でよく見えるので、ダニではないかと質問される。

コチャタテ科 Trogiidae

コチャタテ *Trogium pulsatorium*

コチャタテ科 Liposcelidae

ヒラチャタテ *Liposcelis bostrychophilus*

カツブシチャタテ *L. entomophilus*

ソーメンチャタテ *L. simulans*

コチャタテ *L. divinatorius*

スカシチャタテ科 Hemipsocidae

スカシチャタテ *Hemipsocus chloroticus*

ヒメチャタテ科 Lachesillidae

ヒメチャタテ *Lachesilla pedicularia*

8. カメムシ（半翅）目 Hemiptara

ヨコバイ（同翅）亜目では、ヨコバイ科 Deltocephalidae やウンカ科 Delphacidae のものが灯火に飛来し、特に1966年に鹿児島県で一晩に予察灯（二重線条全艶消電球60W）1灯で、何と214万頭のウンカが採集されたというが、不快害虫としての記録はない。大都市での現象ではないので、あまり問題にならなかったのかも知れない。飛来虫では稀にアブラムシ上科 Aphidoidae の有翅虫が食品上に発見されることがある。このほか、ワタフキカイガラムシ科 Margarodidae のオオワラジカイガラムシ *Drosicha corpulenta* のふ化幼虫が移動期（12月）に室内に侵入したり、洗濯物に群がり騒がれることがある。この場合、単に形や数の問題だけでなく潰すと赤い汁が出るから一層不気味に思われるのであろう。

カメムシ（異翅）亜目では、集団越冬のため屋内に侵入するカメムシ類が不快害虫の筆頭であろう。この現象は山間の保養施設や山林に近い住宅団地など、山間や山麓部に目立って多い。山間の

宿舎ではカメムシによる被害があまりはげしいので、閉鎖せざるを得なくなった所もあると聞いている。その被害は単に強い臭気だけでなく排泄物による衣類や寝具の汚染も起る。また彼らは電灯にも誘引されるので、時には食卓上に落下して食物を汚染することもある。被害は越冬が始まる晩秋と越冬地から脱出する春期に大きい。厳寒期でも暖房によって室内の虫が動き出し被害が出る。ところでカメムシの種類は関東から東北、あるいは信越の山地では、カメムシ科 Pentatomidae のクサギカメムシ *Halyomorpha picus* とスコットカメムシ *Menida sottoi* が優占種でツノカメムシ科 Acanthosomatidae のベニモンカメムシ *Elasmotethus humeralis*、カメムシ科のツマジロカメムシ *Menida violacea*、彼らの天敵であるサシガメ科 Reduviidae のオオトビサシガメ *Isyndus obscurus* などが混っている。関西方面では専らマルカメムシ科 Plataspidae のマルカメムシ *Megacopta punctissima* である。何れも年1世代で、成虫で越冬する。ただクサギカメムシは千葉県以南では1部年2世代である。

カメムシ類の屋内への侵入を防ぐよい方法はないようで、気密室程度の設計施工を必要とするようである。現在実行可能な防除法としては、越冬前の野外における生息密度を農業用殺虫剤散布により下げる程度しかないようである。当然、越冬場所となる家屋の隙間に殺虫剤の残留散布が考えられるが、使用を許可された薬剤はない。ただ、スコットカメムシは生息地からよく見える家屋に飛来が多いので、家屋周辺の立木を残すようにしたり、生垣を育てたりすると侵入数を軽減することができるということである。

9. コウチュウ(鞘翅)目 Coleoptera

本目は最大の種類を有し、その生活も極めて多様化している。人間の利用するものを加害する木材害虫や食品害虫などと称されるものを除き、不快を訴えられるものは種類の割には少い。筆者の知る範囲のものは次のとおりである。

ハネカクシ科 Staphylinidae では体液にペデリンを含み皮膚炎をおこるアオバアリガタハネカクシ *Paederus fuscipes* は衛生害虫としてよく知られ

るが、筆者はセミゾハネカクシの1種 *Carpelimus* sp. の大発生で、灯火に大量に飛来し不快を訴えられた例を聞いている。渡辺泰明氏の教示によると、本属のものは泥中に集団的に営巣することがあるとのことで、どこか近くにこの集団ができていたものと思われる。

テントウムシ科 Coccinellidae のナミテントウ *Harmonia axyridus* は前述のカメムシ類のように集団越冬をするので、稀に家屋の隙間を利用することがあり、不快を訴えられることがある。なお本種は脚の関節より黄色い臭気のある液を出すことも嫌われる原因である。

ヒメマキムシ科 Lathridiidae は食菌性で、集合住宅で建材に使用した木材(合板を含む)や畳に生じた糸状菌に発生して問題となることがある。田中和夫(1986, 本誌 No. 27・28)は屋内で発見される19種をあげ、そのうちクビレヒメマキムシ *Cartodere constricta*、ムナビロヒメマキムシ *Dienerella costulata*、ホソヒメマキムシ *D. filum* の3種がわが国での発見頻度が高いと言っている。なお本邦産の種では飼育記録はないようである。

10. ハエ(双翅)目 Diptera

本目のものも種類数が多く、またその生活も極めて多様であるが、腐食性のものに不快昆虫が多い。恐らく人間生活から排出される汚物に発生するので、発生量が多くなりやすいためであろう。次に衛生害虫として扱われる吸血昆虫や病源細菌の運搬者を除き、不快害虫として扱われるものについて記してみよう。

Ⅰ チョウバエ(チョウカ)科 Psychodidae : 邦産種は約30種知られるが、問題となるのはホシチョウバエ *Psychoda alternata* とオオチョウバエ *Telmatoscopus albipunctatus* の2種であり、後者は熱帯に広く分布するもので、日本へは近年侵入したものとわれ初記録は1965年である。戦前は側溝や肥料溜めに発生していて、屋内に侵入することは少なかったが、下水道・浄化槽の普及に伴って屋内飛来が増え、湿気の多い台所・洗面所・風呂場などによく見られる。時に都市下水道の末端処理施設の汚泥に大発生して周辺の住人を悩ますことがある。産卵は水面の浮游物に行われ、幼虫

は腐敗物を食って成長し、1世代約20日で完了する。したがって不快の原因となる成虫は冬期以外はずっと見られる。

殺虫剤に対しては比較的弱く、有機燐剤が有効であり、浄化槽のような閉鎖空間ではDDVP樹脂蒸散剤を吊るすと羽化した成虫と汚泥表面にいる幼虫に殺虫効果がある。可能であれば水面浮遊物を無くすることが、生育場所を減らすことになる。

ii ユスリカ科 Chironomidae：邦産種は約500種といわれるが、分類学的研究は近年始ったばかりである。

本科のものは、水面または水辺にゼラチン状のものに覆われた卵塊を産み、幼虫は水底で泥中の微生物に頼って成長する。蛹はカのオニボウフラのようによく泳ぎ、水面に浮いて羽化する。1世代は短いものが普通であるが、アカムシユスリカ *Tokunagayusurika akamusi* のように1年かかるものもある。

ユスリカ幼虫は水底でいろいろな有機物を分解し水質浄化に貢献し、一方では魚類の好餌となり大いに人々の役に立っている。しかし大発生すると、単に不快ではすまされず、アレルギーともなり問題となる。大発生する種類は地域差もあるが、発生件数の多い上位5種と発生場所・季節をあげると次のとおりである。

- ① セスジユスリカ *Chironomus yoshimatsui*：都市河川や下水で周年発生する。
- ② オオユスリカ *C. salinarius*：汚染の進んだ湖沼に発生し、4, 7, 10月にピークがある。
- ③ シオユスリカ *C. pulmosus*：海辺の埋立地の溜り水に多く、夏期に発生する。
- ④ オオヤマチビユスリカ *Tanytulus oyamai*：水田や溜り水に出て、初夏に多い。
- ⑤ アカムシユスリカ *Tokunagayusurika akamusi*：汚染された湖沼に11月頃発生する

このように大発生をするユスリカ類の幼虫の生息する水質は、流水・止水を問わずBOD 10～20ppm、すなわち β -強腐水～ α -中腐水の汚水域で、何れも人為的に汚染された水域である点に注目すべきである。すなわち、水田・湖沼では肥料・生活排水などによる汚染であり、都市河川ではBOD 30ppm以上でほとんど生物が住めない

状態（臭気もはげしく、メタンガスの発生もある状態）であったものが、浄化作戦の効果が現われBOD値が下がり、ユスリカが生息できるようになったためである。どんな場合でもユスリカの大敵となる捕食性の節足動物や魚類が生息不可能で、生物相が単純化することが大発生につながるのである。現実にはユスリカに悩まされる状況のときには、水中の幼虫密度は1Lに10,000頭前後といわれ、電灯1灯当たり1000を越えるという。

防除法であるが、屋内への飛来を防ぐには網戸を用いるだけでなく、屋外に紫外部の多い青色蛍光灯を点灯し、屋内照明はできるだけ紫外部の少ないものを用いるように工夫することである。発生水域対策は水質を向上させ、天敵が充分繁殖できるようにすることが先決であるが、とりあえずは殺虫剤に頼らざるを得ない。幼虫は泥中に生活しているので、水中に沈降する剤型のものを選ぶ必要がある。一般的には有機燐系のものが用いられてきたが、近年生態系に対する影響の少ない幼若ホルモン系の殺虫剤が開発されて効果をあげている。

以上がハエ目の2大不快害虫であるが、以下にその他として稀に問題になるものをあげておく。

iii クロバネキノコバエ（クロカ）科 Sciariidae：本科のものは次の種と共に屋内に持ち込まれた鉢物（恐らく油粕などの有機肥料で育つ）から発生し、不快と訴えられることがある。知られている種はチビクロバネキノコバエ（チビクロカ）*Bradysia agrestis*である。

iv ニセケバエ（ゴミカ）科 Scatopsidae：クロツヤニセケバエ（クロツヤゴミカ）*Scatopse notata*が前種と共に知られている。

v ミズアブ科 Stratiomyidae：人家近くに発生する種はコウカアブ *Ptecticus tenebrifer* とアメリカミズアブ *Hermetia illucens* で、生ごみや便槽に発生し、成虫は屋内に入り窓際で飛んでいる。一見ハチではないかといやがられる。幼虫は汚水のマンホール付近で見られ、その形が変っているので子供たちの興味を引く。

vi チーズバエ科 Piophilidae：チーズバエ *Piophila casei* のみが知られ、幼虫は蛋白質性食品で育つが、塩蔵原皮で発見されたことがあり、体を折りまげてはねることで有名である。

vii ノミバエ科 Phoridae: 本科のものも各種の腐蝕物に発生するので人家近くにも見られ、コシアキノミバエ *Dohrniphora cornuta* の成虫がよく卓上を歩きまわり、数が多いと不快を訴えられることがある。

viii ハマベバエ科: ハマベバエ *Coelopa frigida* の幼虫は海浜に打上げられた海草などの堆積物で生育し、大発生すると風によって屋内に運ばれ問題となる。

ix トゲハネバエ科 Heleomyzidae: 幼虫は腐食性で、センチトゲハネバエ *Orbella tokyoensis* がときどき植木鉢から出ることがある。

x ハヤトビバエ科 Sphaeroceridae: 本科のものも腐食性で、ハマベハヤトビバエ *Leptocera fuscipennis* が塩分を含んだ羽田沖廃棄物処理場で、1977年頃から大発生し、周辺の住宅地の灯火に飛来し騒がれた。またフサヒゲハヤトビバエ *L. caenosa* が屋内に堆積したネズミの糞に発生して問題となったことがある。後者は発生源が屋内であったが、一応本科のものは要注意と思われる。

xi ショウジョウバエ科 Drosophilidae: 成虫も幼虫も酵母に頼っているキイロショウジョウバエ *Drosophila melanogaster* が最も普通で、台所の生ごみに発生して食卓上に飛来することが多い。アルコールによく誘引されるので、酒宴の席によく現われる。

11. チョウ（鱗翅）目 Lepidoptera

本目のものの多くはガと称され夜間活動性で、電灯によく集るので、特定の種でなくても、その量が多いと迷惑虫となる。数は少なくとも大型のヤマムシガ科 Saturniidae やスズメガ科 Sphingidae のものは非常に嫌う人もいる。実際にドクガ *Euproctis subflava* (ドクガ科 Luantriidae) は成虫の尾端の鱗粉部に幼虫の毒針毛を含み、灯火に來たドクガに刺されることになり、一度経験した人はほかのガも刺すのではないかと嫌うようになる。また、チャドクガ *E. pseudoconspersa* が窓際のツバキやサンザンカに発生して幼虫の毒針毛が風に乗り屋内に流れ込み、屋内の作業者が痒みを訴えることがある。これらはむしろ衛生害虫の範囲で、不快害虫として扱われるものは専ら幼

虫である。ヒトリガ科 Arctidae のアメリカシロヒトリ *Hyphantria cunea* は街路樹に発生したとき、老熟幼虫が蛹化場所を探して商店内に侵入して困った例を聞いた。同科のヤネホソバ *Eilema fscadorsalis* もよく屋根の地衣類に発生して屋内に落下して問題視される。このほかドクガ科のマイマイガ *Lymantria dispar* やミノガ科 Psychidae のオオノミガ *Eumeta japonica* のふ化幼虫は何れも長毛を有し風によって分散しやすい形であり、これらがとばされて窓から飛び込むことがある。近くで前年に大発生があったときなどは要注意であるが、特別の対策はない。

12. トビケラ（毛翅）目 Trichoptera

京都市のように市街地の中央を流れる比較的清流にときどき大発生し、電灯に飛来して不快を訴えられる。現在までに知られているものは主にシマトビケラ科 Hydropsychidae のもので、鴨川ではコガタシマトビケラ *Cheumatopsyche brevilineatis* が、宇治川ではオオシマトビケラ *Macronema lacustris* とナカハラシマトビケラ *Hydropsyche sefensis* が大発生する。本科の幼虫は河川水中の石面に糸で綴った巣をつくり、その前面につくった網にかかる有機物を食って成長する。したがって底質が適していれば、河川の汚濁によって餌が増加し生息密度が高くなることになる。この対策は誘殺灯や網戸で室内への侵入を防ぐしか方法はないが、恒久的にはユスリカ対策と同様に河川の水質管理しかないと思われる。

13. ハチ（膜翅）目 Hymenoptera

本目のもので不快害虫となるものはアリ科 Formicidae のイエヒメアリ *Monomorium pharaonis* くらいのもので、稀に食品害虫に寄生していたコバチ上科 Chalcidoidea やコマコバチ科 Braconidae のものの発生量が多いとき、当事者が心配する程度である。そのほか、刺咬被害をもたらすスズメバチ科 Vespidae・ミツバチ科 Apidae のものと屋内性のアリガタバチ Bethyidae の2種が衛生害虫として扱われる。

イエヒメアリは熱帯原産なので、以前は冬期低温となる木造家屋では越冬できず、専らコンク

リート建造物で越冬繁殖していたが、近年暖房の発達により、集合住宅・事務所・百貨店・病院など広範囲で問題となっている。その食性は広く、ほとんどすべての食品を食う。10～20頭の雌（女王）を中心とした群をつくり、一定の巣を持たず、建物の隙間や家具・調度品の間隙に住み、条件が悪くなると移動してしまう。したがって殺虫剤を使用したとき、全滅したのか、一時移動したのかわからず効果判定がしにくい。わが国における生活史などの解明は遅れているが、バイト剤による防除が考えられており、やがて防除法は確立されるであろう。

14. 甲殻綱 Crustacea

陸棲のものに不快を訴えられるものがある。

ワラジムシ目（等脚類）Isopoda のワラジムシ *Porcellio scaber*（ワラジムシ科 Ouisidae）は鉢物と共に屋内に運ばれ、ときに不快を訴えられるが、近似のオカダンゴムシ *Armedillidium vulgare*（ダンゴムシ科 Armadillidae）は問題にされない。恐らく前者は主に腐植質に、後者は生植物に頼っている関係で、後者の般入が少いからと思われる。なお、ワラジムシは地下街やガード下のような湿度の高い飲食店でもときどき見かけることがある。

15. 多足類 Myriapoda

ゲジ・ムカデ・ヤスデが不快虫とされる。

不快を訴えられる最たるものはムカデ（唇脚）綱 Chilopoda ゲジ目 Scutigromorpha ゲジ科 Thereuonematidae のゲジ *Thereuonema hilgendorfi* あるいはオオゲジ *Thereuopoda clunifera* であろう。何れも全くの捕食性のもので、コオロギやゴキブリなどを食う益虫であるが、そのグロテスクな形態で人々に不快感を与える。おおむね夜行性で昼間はほとんど活動しない。とり立てて防除の必要はないが、多くの殺虫剤で死滅する。ゲジでは成体になるのに3年かかるが、オオゲジもそれ位かかると思われる。

オオムカデ目 Scolopendromorpha オオムカデ科 Scolopendridae オオムカデ *Scolopendra subspinipes* の邦産種は3亜種に分けられているが、本

州で普通にみられるのはトビズムカデ *S.s. mutilans* といわれ、山麓地の新興住宅地では悩まされる。前者と同じく捕食性のものであるが過って咬みつかれると激痛を覚える。室内に侵入したものは殺虫剤で殺すが、床下や家の周囲を清潔にして残効性のある殺虫剤を散布しておくといよい。集合住宅ではベランダの鉢物や、樋に溜ったごみなどの中に生息するものが侵入することがあるので、室内で見かけたら、一応そのあたりを調べ生活場所をなくすことを考えなければならない。

ヤスデ（倍脚）綱 Diplopoda のものは、主に腐植質で育つが、ときに大発生することがあり、屋内まで侵入して不快を訴えることがある。屋内侵入種についての記録は少ないようであるが、梅雨期などにときどき問い合わせがある。大発生で有名なのは長野県で発生するキシヤヤスデ *Japonaria laminata armigera*（オビヤスデ目 Polydesmoidea ババヤスデ科 Leptodesmidae）で、線路上を移動するときは車輪を滑らせ列車を止める。この際は火焰放射器で焼くのが最上といわれる。

16. ダニ目 Acarina

鉄筋コンクリート集合住宅が普遍的になって問題になってきたダニ問題は、今日では常識化している。ところで家の中で発見されるダニの種類は通常で約30種といわれ、記録された種の合計は150種にもなるということである。しかし現実に不快害虫として問題視されるものはコナダニ科 Acaridae、チリダニ科 Pyroglyphidae、ツメダニ科 Cheyletidae の3科に属する数種のダニ類である。

戦前、木造住宅が主流を占めていた頃のダニは、どこの家でもネズミが生息していて、ネズミに寄生するイエダニ *Ornithonyssus bacoti*（オオサシダニ科 Macronyssidae）に刺される程度であった。そして、ときどき食品に発生するコナダニ類が食品害虫として顔を出すくらいであった。戦後集合住宅が一般化するにつれ、1960年代になって住居内のダニが問題になり少しずつ研究されるようになった。その結果住宅内ではチリダニ類が圧倒的に多く、喘息の原因にもなっていることがわかり、

環境衛生上問題となり、不快害虫としてとりあげられるようになった。集合住宅が完成して入居がはじまると、最初に目につくのは畳のカビに発生していたケナガコナダニ *Tyrophagus putrescentiae* とアシフトコナダニ *Acarus siro* (数種の混合といわれる) で、入居後2~3年悩まされる。これらの天敵であるツメダニ科 Cheyletidae のものも発生して刺咬被害が出る。特にミナミツメダニ *Chelacaropsis moorei* による被害は大きい。この頃には食菌性のチャタテムシやヒメマキムシなども同時に見つかることも多く、畳中の水分率も高く13%以上で、15~18%になるとケナガコケダニが増え畳に粉を散いたようになる。5年もたち畳が乾いてくるとダニ相は変りチリダニが優占する傾向が現われる。特にヤケヒョウヒダニ *Dermatophagoides pteronyssinus*, コナヒョウダニ *D. farinae*, シワダニ *Euroglyphus mainei* の3種が多く、何れも喘息のアレルゲンとなる。もちろん、この時期になってもツメダニは繁殖している。

ダニ類の防除には有機燐系とピレスロイド系の殺虫剤が用いられていて、コナダニとツメダニ類には効果があるが、チリダニには効果薄いといわれている。何れにしてもダニ退治を室内で行うのであるから殺虫剤に頼らない方がよい。すなわち、室内の乾燥を考え、できる限り室内塵を減らすことである。空中湿度 60% RH 以下になれば、ほとんどのダニは生存できなくなるし、500W 以上の強力な電気掃除器で丁寧に時間をかけて掃除するだけでも大いに被害を減らすことができる。チリダニの死骸もアレルゲンとなるから常に電気掃除器で室内塵を取除くことが肝心である。

17. クモ(蛛形)目 Aranea

クモ類は本来害虫の捕食者であるので不快害虫とはいえないが、その形がグロテスクなのと吐糸して網の巣をつくるので嫌われる。

クモ類には網を張り餌を捕える造網性のものと、網を張らずに徘徊して餌を探索するものとがあり、わが国には約1000種を産する。屋内で見られるのはそのうち40~50種といわれる。

不快を訴えられるものの王者は、何といても日本最大種のアシダカグモ *Heteropoda venatoria*

(アシダカグモ科 Heteropodidae) で、体長 20~30mm で脚を伸ばると 10cm 前後になる。ある調査では本種に対し女性で100%, 男性で95% が不快感を示したというが、屋内ではゴキブリの有力な天敵であるので保護してやりたいものである。

普通屋内で見かける徘徊性のクモは、上述のアシダカグモ、コアシダカグモ *H. forcipata* とハエトリグモ類である。ハエトリグモ科 Salticidae のものでは、チャスジハエトリ *Plexippus paykulli*, ミスジハエトリ *P. setipes*, シラヒゲハエトリ *Menemerus confusus*, アダンソンハエトリ *Hasarius adansoni*, ネコハエトリ *Carrohotus xanthogramma* の5種が屋内に、アシフトハエトリ *Evarcha crassipes* が屋外壁面に普通に見られる。造網性のクモではユウレイグモ科 Pholcidae のイエユウレイグモ *Pholcus phalangioides*, ヒメグモ科 Theridiidae のオオヒメグモ *Achaearanea tepidariorum*, ヒラタグモ科 Urocteidae のヒラタグモ *Uroctea compactilis*, チリグモ科 Oecobiidae のチリグモ *Oecobius annulipes* などが普通で、窓辺にはコガネグモ科 Araneidae のズグロオニグモ *Yaginumia sia*, オニグモ *Araneus ventricosus* などが多く、玄関ポーチにはアシナガグモ科 Tetragnathidae のアシナガグモ *Tetragnatha praedonica* が見られる。そのほか郊外団地などでフクログモ科 Clubionidae のカバキコマチグモ *Chiracanthium japonicum* が室内に侵入し掴まえて咬まれることがある。

クモの網に卵囊が下がっていたり、ゴミや餌が引っかかっていたりして、汚れた状態であると、不精をしているように見え嫌われる。実際には多くの害虫を採って食べているので、大いに人々の生活に役立っているにも拘らず、見かけだけで嫌われ不快害虫にしてしまっている。ただ、クモの巣は水洗程度では落ちにくく、回収して再使用する牛乳瓶などの中に張られると手を焼くことがある。また夜間照明をする白壁に張られた巣も美観を損ねるので、その除去には苦心させられる。何れにしてもクモが多いことは餌となる虫が多いことを意味しているので、クモを減らすためには餌となる虫を減らすことが先決となろう。なおクモ類は有機燐系と有機塩素系殺虫剤に弱く、カーバ

メイト系には強いといわれる。

18. 脊椎動物 Vertebrata

脊椎動物では屋根裏や天井裏への侵入や、そこでの営巣によっておこる問題である。木造住宅では天井裏のネズミの運動会で安眠を妨げられたことを憶えている人も多いであろう。天井裏のネズミはクマネズミ *Rattus rattus* が主体といわれるが、私の経験ではドブネズミ *Rattus norvegicus* も侵入していたようである。このネズミを追って、アオダイショウ *Elaphe climacophora*, テン *Martes melampus*, イタチ *Mustela itasti* (関西の都市部ではチョウセンイタチ *M. sibirica*) が侵入することがあり、アオダイショウは気になる程の音を立てないが、イタチやテンでは家鳴り震動すると形容できるほどの激しい音を立てるということである。リス科 *Sciuridae* のムササビ *Petaurista leucogenys* も屋根裏に住みつき、大きな音を立てると聞いている。このほか屋根裏へは営巣目的でムクドリ *Sturnus cineraceus* あるいはコムクドリ *S. philippensis* が侵入して、早朝からガサガサと動き春眠を妨げる。家屋の構造によってはドバト *Columba livia* (ハト科 *Columbidae*) の営巣場所を提供することにもなる。私は木造家屋の戸袋の上での営巣、バルコニーでの営巣などを実見したことがあるが、何れにしてもその排泄物による汚染と悪臭には閉口させられた。これら鳥類が営巣すると、ワクモ類 *Dermanyssus* spp. による刺咬害もあり得る。ドバトは完全な穀物食で人間と共に住み、現在では増えすぎて、神社仏閣のみならずカラスと共に都市鳥害の筆頭となっている。筆者の見るところでは、ハトは平和の使者として保護されているばかりでなく、建造物に対しハトが住みにくい構造が考えられていないところにも問題がありそうである。悪臭で問題になるのは上述の鳥類ばかりでなく、アブラコウモリ (イエコウモリ) *Pipistrellus abramus* もあげられよう。アブラコウモリが巣くっている屋根裏や天井裏に彼らの糞尿が溜まり悪臭を放つことがあり、また彼らの住み家になった工場や倉庫では落下した糞尿による商品の汚染が起る。戦前は木造住宅の羽目板の裏に隠れているのをよく見掛けたが、戦後火災予

防のためモルタル仕上げが義務づけられて激減したが、郊外ではまだ普通に見られ、ときどき問題になる。筆者は約 1m² の便所の天井裏に30頭余りが住みつき駆除した業者の話を聞いたことがある。

いずれにしても上記の屋根裏や天井裏への侵入者に対しては、侵入路を塞ぐことが確実な方法である。

以上のように不快あるいは迷惑動物を一通り検討してみると、人間の生活様式の変化が対象動物の増殖に手を借している場合が多いが、ときには対象動物が本来の生活をやめて適応の結果人間生活の中に入り込んでくる場合もあることを示しているように思える。きわめて単純な不快という感覚は個人差が大きく、その上地域差・民俗差なども絡まって完全な客観的尺度は見出し得ないだろうと思われるが、厄介動物としては、ある程度客観性をもたすことができよう。しかしながら、人々の生活は新技術と共にどんどん変化してゆくので、今まで何でもなかった虫が突然不快害虫となることも考えられるが、その予測はなかなかの難問題と思われる。

なお、本文を草するに当り多くのペストコントロール関係者からの情報を参考にさせて頂いた。特に渡辺泰明氏にはハネカクシについての御教示を、菊屋奈良義氏にはクモについての御教示を得たことを記して謝意を表する。

文 献

- 1) 上村清 (1986) 暮らしの中のおじゃま虫, 井上書院
- 2) 森谷清樹 (1989) 家の中のダニ, 裳華房
- 3) 日本ペストコントロール協会 (1987) 原色ペストコントロール図説, 第Ⅰ集
- 4) 同上 (1988) 同上, 第Ⅱ集
- 5) 同上 (1990) 同上, 第Ⅲ集
- 6) 野村健一編 (1980) 応用昆虫学総説, 養賢堂
- 7) 篠原圭三郎 (1974) 多足類の採集と観察, ニューサイエンス社
- 8) 安富和男・梅谷献二 (1983) 衛生害虫と衣食住の害虫, 全国農村教育協会
- 9) 吉川・芦沢・山田 (1989) ダニ・カビ・結露, 井上書院